SDGs HeadLine2022

～SDG s 達成への道～

燈台の光プロジェクト　Be Leaders 新聞班

2022 年 10 月 12 日（水）　2022 年度　4 号

（通巻 13 号）

この新聞は学校 HP にも掲載しています。

「海ごみ」環境学習 in いえしま　Be Leaders 9 名参加

台風の影響で増えた漂着ゴミも　意外なごみも

十月一日、兵庫県主催の「海のごみ環境学習 in いえしま」が行われ、私たち Be Leaders も参加した。秋晴れの中、参加者 19 人の内、賢明からは中学生・高校生合わせて 9 名が参加した。砂浜のゴミ拾い、カヤック体験、砂浜の砂からマイクロプラスチックを採取するという実験を行った。

砂浜のゴミ拾いは想像していたよりもはるかに多いゴミがあった。ゴミの中には牡蠣養殖用パイプやナイロンの破片など小さいものから大きな漁具、2リットル以上入るであろう容器など大きいものまで様々であった。おもしろいものではゴルフボールなどがあった。そしてもちろん大量のペットボトル。スタッフの方も含め約 30 人がかりで 45 分程掃除した。外観は綺麗になったが、まだまだゴミは落ちていて、今回の清掃だけでは取りきれなかった。あと二、三回はいく必要があるだろう。

中国四国地方環境事務所の調査では、瀬戸内海側に流れてくるゴミは空き缶、ペットボトル、プラスチックごみが多く、瀬戸内海の海のごみの発生源は、ほとんどが国内、しかも瀬戸内 地域陸側の河川から流れてきたものだそうだ。このことから私たちが普段の生活で、街中で捨てたゴミが河川を通ってやがて海にたどり着くことがわかる。香川県によると瀬戸内海では年間に4，500ｔものごみが流れて着き、そのうち、31 %はボランティアなどにより回収されるが、16 %は海底に沈んでたまり、53 %は瀬戸内海の外の海へ流れ出す。外の海に流れ出したごみは、日本の海だけでなくハワイなど海外へ流れ着くものもあるそうだ。海底にも沈み、私達が直接目に見えないところも汚れているということだ。

カヤック体験では一人一艇に乗り、自力で櫂を操りながら目的地まで約 50 分かけて進んだ。思った以上に力が必要で思い通りに進まなかったが、海の上で風がありとても気持ち良かった。まるでハンモックに寝転んでいるような気分だった。海面にゴミはなく景色も良かった。

いえしま自然体験センターに戻り、4 班に分かれて砂浜の砂からマイクロプラスチック探しをした。マイクロプラスチックとは直径ミリメートル以下の小さなプラスチックのことをいう。25 センチメートル×25 センチメートルの枠を砂浜に置き、深さ約 3 センチメートルの砂をバケツに入れた。それに海水を入れ、メダカ用の柄を使ってバケツの中を混ぜ、浮いたプラスチックを網ですくう。その作業を何度か繰り返すと、マイクロプラスチックを集めることができる。集めたプラスチックをバットに移し、色ごとに分けた。すると赤、青、緑、茶、白などいろいろな色のプラスチックがあった。4 班のうち2班は満潮時に海水が上がってくる線（波打ち際線）の近くで、他の2班は台風の時に海水が上がってくる線（台風線）の近くで採集した。波打ち際線の近くで採集した2班は各 約 30 個、台風線の近くで採集した班は各 約 80 個のマイクロプラスチックがあった。よく見ないと見つからない

（二面へ続く）

台風の影響でごみは（職員の方の）下見の時よりかなり増加。大型ごみも。

賢明人語

「秋といえば」なんだろうか。秋刀魚、栗、梨、さつまいも…。「秋といえば」食欲の秋である。夏バテし食欲低減していた人も、そうでない人も秋の食材は食欲をそそられるのではないのだろうか。▼そんな秋であるがそれ以外にも台風がよく来る季節だとイメージする人もいるだろう。食欲の秋と台風の来る秋。深いところで関係していそうだ。▼例えば秋刀魚、地球温暖化によって秋刀魚の回遊ルートが変わり、不漁の状態が続いている。台風は近年、地球温暖化の影響で大型化し、被害も拡大している。▼どちらとも地球温暖化が大きく関係しているのだ。▼地球温暖化は地球全体、世界の気温が高くなっている現象であるため、影響するのは日本人に留まらずこの世界に住んでいる人々、農業・漁業にそして島（土地）の存在までにも被害が及んでいる。南極の氷が地球温暖化によって溶けてしまい、海水面が上昇し面積の小さい島が海に呑み込まれてしまった例があるのだ。日本も島国であるため安易に聞き捨てならない。▼このように地球温暖化は規模が大きいため全ての対策をするには多くの時間が必要になる。また、もともと農業は天候に左右されやすいことも相まって、地球温暖化の影響を受けやすい。このまま長い年月、地球温暖化の影響を受け続けてしまうと、100年後の秋の味覚はまた違ったものに変わってしまうかもしれない。▼それとも、科学技術が進歩して今の秋の気候を維持できるような施設の中で食料を栽培することができる世の中が来るのだろうか。▼心配しつつも、今年も秋の味覚への期待が膨らんでいる（北原萌衣）

ほど小さな１ミリもないくらいのプラスチックもあった。マイクロプラスチックは人間にどのような影響を及ぼすのか。マイクロプラスチックには1次マイクロプラスチックと2次マイクロプラスチックの2種類がある。1次マイクロプラスチックとはスクラブ系の洗顔料や化粧品・歯磨き粉・洗濯洗剤に入っているつぶつぶ（マイクロビーズを含む）または製品原料となる樹脂ペレットなど、工業的に小さい状態で生産されるものだ。この1次マイクロプラスチックは世界のプラスチック排出量15％にあたる150万トンだと考えられている。一方、2次マイクロプラスチックは、街に捨てられたビニール袋やペットボトル、タバコのフィルターといったプラスチック製品が溝などから川を伝って海へ流出し、紫外線による劣化や波の作用などにより破砕されて、マイクロサイズになったもののことを指す。これらのマイクロプラスチックは人の口に入ったとしても、そのまま排泄される。しかし、プラスチック製品には、柔らかくしたりするためなどで添加剤が加えられており、その中には"環境ホルモン"と呼ばれる人体に有害な物質が含まれていることが多々ある。マイクロプラスチックは人間にとって有害である。

海にはわたしたちが砂浜のゴミ拾いで拾ったゴミや砂浜から探したマイクロプラスチックの何倍ものゴミがある。よく知られていることだが、2050年までに世界中の魚の重量を海のプラスチックゴミが超えてしまうという予想も発表されている。ゴミの元になるプラスチックを作るのも人間、ゴミを捨てるのも拾うのも人間だ。まずは世界の一人ひとりが海ゴミの問題に関心を持ち、海はもちろん路上や川、溝にもゴミを捨てないことが大切だと感じた。そして未来の子どもたちにもこの美しい自然を残すべきであり、それが今を生きる人々の責任であると思う。ごみ問題の関心を持ち、そしてそこから何をするか、それが本当に大切である。（峯　明里）

第四回賢明女子学院弁論大会

下克上　中学一年生　初の栄冠に「松浦杯」

九月二十四日土曜日の昼下がり、メディアセンターで第4回賢明弁論大会松浦杯が行われた。弁士は中学1年生から高校2年生までの計10人。個人的注目ポイントは2つ。1つ目は松浦杯史上初となる、賢明生以外の参加。もう一つはやはり、誰が松浦杯を手にするかということだ。今までは高2が栄光を手にしてきたが、今年はどうなのか。やはり経験豊富な先輩が意地を見せるのか、それとも後輩による下克上が起きるのか。波乱の予感の松浦杯である。

まずは賢明生以外の参加者について。弁士の名は花田太一さん、淳心学院高校1年生だ。論旨は、新型コロナウイルス感染症による環境問題についてで、堂々とした話しぶりが印象に残っている。ただ観客を見るのではなく、「見渡す」ということができていて、その説得力に会場全体が釘付けになった。そして彼に投げかけられた質問は想像される斜め上のものだった。松浦杯では、質疑応答が20点配点されている。彼はコロナがもたらした環境についての「悪い点」を主張していたのだから、てっきり「それを改善するために、学校全体で取り組めることはなんですか」なんて質問を想像していたら、「では逆にコロナがもたらした環境についての「良い点」は何ですか」というものだったのだ。なんて意地の悪い、だがしかし、なんて面白い。思わずマスクで隠された口元がニヤリとしてしまったのは私のひねくれてしまった性格故か。「旅行する人が減ったことにより、交通量が減り、排出される二酸化炭素が減った」と華麗に返す姿も印象的で、5位に入賞した。そして気になる王者について。第4回賢明弁論大会松浦杯第1位は、中学1年生Aクラス、野中麻央さんだ。発表された瞬間、聴衆に来ていた彼女の同級生の歓声と他の参加者、観客のどよめきが広がり、どの人にも納得の表情が浮かんだ。それほどまでに彼女の弁論は素晴らしかった。中学1年生なのに、いやむしろ、中学1年生という立場を存分に活用した弁論だったように思う。彼女の論旨は、コロナ禍により格差がより広がった教育格差とその改善方法だ。驚くべきはその口調。てっきり「ですます」口調かと思っていたのだが、「だ、である」口調で、そこに「届けたい」という思いが溢れ

今年度はメディアセンターで開催。審査委員として姫路環境開発の瀧本様，青年会議所未来環境創造委員会の福永様，淳心の藤村校長先生，穴原先生に参加していただきました。

たであろう前のめりな姿勢に、どこか勝気な瞳が合わさればもう、堂々とした「弁士」の姿がそこにあった。しかし決して暑苦しくならないのは、説明できない中学1年生ならではの「フレッシュさ」が溢れていたからだろう。熱い思いだけど、どこか爽やか、これは中学1年生ならではの特権だと思う。悲しいかな高校1年生の私にはあのフレッシュさはもう出せない。そしてもう一つ驚くべきことはその練習量。2週間以上も毎日朝晩弁論の練習をしていたそうだ。端が少し皺になっている原稿用紙には強調するべきところにマーカーや「ジェスチャー」の文字が書かれていて、彼女の努力が伝わってきた。1位だと発表された瞬間、思わず溢れてきた涙をぬぐいながら表彰状を受け取りに行く姿は会場中の人の胸を打った。

他にもハイライトは多くあったのだが、語り出すとキリがないのでここまでとしておく。どの弁士も力強い弁論で2時間30分があっという間に終わってしまった。はてさて来年はどんな弁論大会となるのか。興味がある人は参加してみてはいかがだろうか。

（菅野柚希）

右淳心　花田太一さん
左優勝者　野中麻央さん

24時間テレビからチャリティーについて考える

皆さんは「チャリティー」と聞いて何を思い浮かべるだろうか？私はチャリティーと聞くと、毎年8月末に放送される24時間テレビが思い浮かぶ。この番組は、1978年から「愛は地球を救う」をテーマに放送され続けている。番組内ではチャリティー募金が実施され、集まったお金は福祉や環境、災害復興に使われている。私は毎年この番組を見ているのだが、近年はこの番組のあり方に疑問を感じながら見ている。

番組内ではハンディキャップをもった子どもたちがダンスを踊ったり、被災した人々の今の暮らしを取材したり、義足や車椅子の方がタレントと共に何かにチャレンジするなどのコーナーが多い。確かに、一生懸命努力して成功しているところを見るのは気持ちがいいし、それがハンディキャップをもった方達だとなお視聴者は感動するだろうし、この方達のために募金したいと思うだろう。しかし、現実はそう甘くはないのだ。ダンスを成功させた子供たちは後何年かすれば自分達に降りかかる社会の差別的な目と格差に衝突するだろうし、被災して地元を追われた方達も戻れるまでに何年かかるかも分からなければ、避難先で住み続けるにあたっての壁もあるだろう。一つ分かっていただきたいのは、私は決して彼らを差別的な目で見ているのではなく、これが日本社会の現実だということだ。近年ようやく女性の社会進出や障がい者雇用についての問題が解消されつつある日本は、世界的に見ると遅れていると言えるだろう。まだまだ女性や障がい者の方達が肩身の狭い社会である。もちろん積極的に女性の社会進出や復帰、障がい者雇用に力を入れている企業も多くある。今まで社会の労働者としては劣って見られていた障がい者の方達には突出した能力があり、それを活かして社会の一員として働きたいという方達が増えている。私は24時間テレビがそんな方達の社会で生きる現実を写してほしいと思っている。現実が全て24時間テレビのような美談で終わる訳ではないのだ。24時間テレビそのものを批判する訳ではないが、この番組でのチャリティーのあり方は変えていくべきだろう。例えば、障がい者雇用を支援する団体への寄付であったり、そういった事への理解を深めるためのイベントを開くためのお金だったりに使うのはどうだろう。それこそ、SDGsや格差社会の解消が囁かれる今だからこそ一度チャリティーの存在意義とその使い道について議論すべきではないだろうか？しかしながら長きにわたりチャリティーに関心を訴えてきた24時間テレビの功績は大きいことは言うまでもない。社会問題と聞くとどこか遠くのことのように感じ、自分には関係のない事だと思ってしまいがちだが、皆さんもどこかで募金をする機会があればその使い道についてほんの少しでいいので考えてみて欲しい。それは間接的にでも彼らのことを考える機会になるからだ。大切なのは、他人事だとは思わずに巡り巡って自分に返ってくる事、つまり自分のこととして考える事なのだ。あなたの考えるチャリティーとはなんだろうか　ぜひ考えてみてほしい。（早田美空）

学院祭

3年ぶりの学院祭一般公開が行われ、私たちBe Leadersは展示を行いました。展示では各班が思い思いに活動内容や活動報告などを展示しました。沢山の方々にご来場頂き、Be Leadersの活動やSDGsについてより深く知って頂くことができました。カラフルで分かりやすい展示にすることで様々な年齢層の方々に興味を持っていただけたかと思います。他のBe Leadersのメンバーも「来てくれた方々に展示には書ききれなかったけれど伝えたい事も口頭でしっかり伝えることが出来た」などと対面で話すことでしか得られない経験が多かったと話していました。初めての展示で私達も沢山の事を学ぶことができました。これからの活動に活かせるようメンバー一同精進していきます。これからの活動にも乞うご期待。一角でフードドライブ・ユニクロ服の力プロジェクトの回収を行いました。みなさまのご協力のおかげでフードドライブが70kg、子ども服を沢山回収させて頂くことができました。フードドライブで頂いた食品は全てフードバンクはりまさんに寄付させて頂きました。沢山のご協力本当にありがとうございました。まだまだ子ども服の回収は続けておりますので家にもう着なくなった子ども服がありましたらお持ちください！（藤原萌衣）

フードドライブ
子ども服回収

H1ベランダ花壇緑のカーテン
ゴーヤ収穫148本
フードバンクへ

今年度、H1のBe Leadersの取り組みとして、ベランダの花壇にゴーヤ、トマトを植え、育てた。結果ゴーヤは148本、トマトは52個収穫できた。正直に書かせてもらおう、想像していたより遥かに多く収穫できて内心この数に驚いている。まさか3桁いくと誰が予想していただろうか。ゴーヤを育てると知った時の衝撃は今でも覚えている。「なぜにゴーヤ…?」と懐疑的に思いながらもゴーヤを植え始めた頃は、葉はへなへな、枯れているのも1つや2つではなかったし、グリーンカーテンなんて夢のまた夢だった。ところがどんどん愛着が湧き、72回生全体で気にかけるようになった頃にはまぁ立派に育って、グリーンカーテンなんてH2のベランダまで伸びていって、なんだか少し感動を覚えるくらいである。しかも一つ一つのゴーヤとトマトのサイズの大きさと言ったら、収穫の際ゴーヤとトマトを詰めた袋が破れないか心配になる程だった。グリーンカーテンの効果としては涼しさ以外にも、授業中の先生が関連付けて話をしてくださったり、食べ物を育てることの難しさを知ったり、色々学ぶこともできた。ゴーヤとトマトは坪田先生が寄付してくださったスイカと併せてNPO法人「フードバンクはりま」さんへ提供した。また熟し過ぎてしまったゴーヤからは来年植える用の種を取り出した。来年のグリーンカーテン担当はもちろん我々ではない。というわけでM3の皆さんよろしくお願いします。グリーンカーテンがH1の恒例行事になればと密かに画作している。

最後になりましたが、アドバイスをくださったり休日に水やりをしてくださった用務員の方々、協力いただいた先生方、テニスボールを当てないよう配慮してくださったテニス部の皆様、ありがとうございました。

（菅野柚希）

行ってきました！
小学校出張授業
妻鹿小学校

今年度から新たに取り組みはじめた小学校出張授業。9月28日にBe Leadersのメンバーの8人が姫路市立妻鹿小学校で出張授業を行いました。日頃取り組んでいる私たちのSDGsに関する活動を紹介し、小学生のみんなとクイズをはさみながら一緒に考え、私たちにできることを考えました。そして自ら動き出すことが大切、できることはある、その思いを伝えてきました。今回は高校2年生の山野さんと高校1年生の松本さんにインタビューしました。

Q.小学校で授業をすることになって一番大変だったことはなんですか？

山野：小学生にも伝わる内容かつ、共感性の高い内容にするように心掛けたところです。興味を持ってもらえないと、聞いていて面白くないと思うし、世界の諸問題を自分ごとのように感じてもらえないと思うので…。まずは、どうやったら楽しい授業になるのかなと、伝える面においての悩みが多かったです。でもそんな悩みも杞憂だった程に小学生のみんなが積極的に発言や質問をしてくれたお陰で、とっても授業していて楽しかったですし、またやりたいなと思うことができました。

Q小学校で授業をした感想を教えて下さい

松本：昨年度の出張授業とは違って、多くのメンバーとしっかり準備した上で行ったので自信を持って授業をすることができました。小学生もSDGsについてたくさん知っていたので驚きました。

Q.これから小学校訪問をすることになったらどのようなことを小学生に伝えていきたいですか？

山野：今回の小学校訪問で、自分の想像していたよりも小学生のレベルの高さ、関心の度合いが高いことを感じました。途中、正直この内容で飽きないかなって思うくらいに、もう既に知ってくれていることが多かったので、次からは小学生のみんながびっくりするような内容や、中高校生ならではの視点や切り込み方を交えて授業できたらなと強く思いました。もっと工夫が必要ですね。

松本：今回は自分達にできることを中心として伝えていきましたが、次はそれだけではなくSDGsに関する現状や過去からの変化も伝えていけたら良いなと思いました。

今回私たちも小学校訪問をしてとても緊張しましたが、先輩方が授業の前に緊張をほぐしてくださったので、練習どおりにすることができました。自分達よりも若い世代に教えることによってSDGsをもっと深く知ってもらったり、私達もどうすればわかりやすく説明できるかを考えることができました。また今回は最初にパワーポイントがスクリーンに映らないというハプニングもあり、そしてNHKさんの取材カメラが入るなどいろいろありましたが、小学生のみんなもSDGsのことをよく知っていて、びっくりするぐらい質問の時に手が挙がり、その内容も難しい質問だったので、自分たちも負けてられないなと思いました。また新たな発見もあり、とても貴重な経験をすることができたので、次の出張授業でも、それを活かして更に良い授業になるようにしていきたいと思いました。

（浮田秀葉・香山裕莉絵・升木真央）